

文献番号	年	出所	内容	文献の種類	文献の性質	予後の重篤性
5-2-7	1960 (S35)	市田文弘(京大ウイルス研究所予防治療部), 鈴木司郎 「本邦における血清肝炎の実態と予防対策の現況」 医学のあゆみ 1960; 34(5); 245-250	血清肝炎の予後は想像より悪く、しかも無黄疸性血清肝炎より肝硬変へ移行するものを併せて考えれば、血清肝炎の予後については十分な注意の喚起を要するものと思われる旨を記載。	他	レ	●
5-2-8	1962 (S37)	北村治(東京大学伝染病研究所内科学研究部)ほか 「輸血後肝炎に関する研究-とくに輸血前からのGPT、GOTによるfollow-upについて-」 肝臓 1962; 4(1); 23-28	輸血量と肝炎発生率に相関がみられることから、ウイルスキャリアの存在を推定し、供血者集団が麻薬、覚せい剤常習者を多く含むことから、集団内でのキャリア化の発生を推察。	学	原	△
5-2-9	1962 (S37)	Allen JG, Carif PA, Sayman WA. Serum hepatitis from transfusions of blood. JAMA 1962; 180(13); 1079-1085	輸血のみもしくは輸血および輸血漿を行われた患者のうち、180日以上生存した2,547例について、血清肝炎発症率は3%(77例)、血清肝炎による死亡率は0.9%(13例)であったこと、39歳以下の患者では血清肝炎による死亡例がみられなかったこと、および輸血量以外の要因は肝炎感染率に影響していないようであることを記載。	他	原	△
5-2-10	1963 (S38)	上野幸久(自衛隊中央病院内科)ほか 「血清肝炎-とくに発生率、転帰と予防対策について」 肝臓 1963; 4(4); 17-23	血清肝炎の調査を行い、外科手術の63.9%に認め、無黄疸性肝炎の頻度が高く、これらは慢性化する可能性も高く、肝硬変へ進展したと推定された例が肝硬変例40例中8例であったことを報告し、血清肝炎が楽観できないものであることを警告。	学	原	●
5-2-11	1963 (S38)	上野幸久(自衛隊中央病院内科, 東京大学医学部)ほか 「血清肝炎の脅威とその対策」 日本医事新報社『日本医事新報』 1963; p.10-14.	血清肝炎は、慢性化しやすく、ときには肝硬変症へと進んでしまうとの問題があること、通常急性肝炎は発病後2か月前後で大多数のものが治ってしまうと一般には考えられているが、近年肝機能検査法が進歩し、肝生検が広く行われるようになってから、肝炎は必ずしも治り易くないことが認められてきていることなどを記載。	他	レ	●
5-2-12	1963 (S38)	北本治(東京大学伝染病研究所附属病院内科), 高山久郎 「輸血後肝炎の臨床」 内科 1963; 11(4); 647-656	輸血後肝炎の経過は個々についてかなりの長短の差があり、一般的には1か月から4か月で完全に治癒に至るものが多いが、流行性肝炎に比較して血清肝炎の経過は長かつ重いものが多いといわれている旨を記載	他	レ	●
5-2-13	1964 (S39)	上野幸久(東京大学)ほか 「無黄疸性肝炎」 内科 1964; 14(1); 52-58	血清肝炎が決して経過のよい疾患でなく、なかなか完全には治癒しない場合が少なくないこと、潜在性進行の例が決してまれではないと報告。	他	レ	●

文献番号	年	出所	内容	文献の種類	文献の性質	予後の重篤性
5-2-14	1964 (S39)	織田敏次(東京大学吉利内科),鈴木宏「血清肝炎の予後」内科 1964;14(1); 59-64	肝炎の慢性化の定義について、『発病後どのくらいの期間を経過して正常化しないものを慢性化したとするかについては、国際肝臓研究会日本支部総会の慢性肝炎の定義に関する公開討議でも取り上げられたが、3か月、4か月あるいは6か月と区々であり結論は得られていない』とし、著者は1年以上経過してなお肝機能検査に以上を求めたものを対象として検討を行った。その結果、T療養所及びT中央病院では、発黄例で18例中6例(33%)、無黄疸例で38例中11例(29%)が慢性化し、吉利内科教室では、入院例で25例中16例(64%)、外来例で25例中11例(44%)であり、『血清肝炎の予後が流行性肝炎に比して悪いことは明らかである。特に無黄疸肝炎でも慢性化例がかなりみられることは注意を要する。』と報告 また、血清肝炎の慢性化症例では、その進展に伴って続発性肝硬変に移行する例が認められること、現在までに報告されている血清肝炎による肝硬変症の発生頻度が0.7~9.9%と非常に相違があることを報告	他	レ	△
5-2-15	1964 (S39)	厚生省薬務局 監修「愛の血液助け合い運動」薬務広報 1964;(562); p.14-18	血清肝炎が、ときには慢性化し、肝硬変に移行して死亡する例があるといわれること、および確実な予防法、治療法がなく、その対策の確立が強く叫ばれていることを報告。	他	他	●
5-2-16	1964 (S39)	World Health Organization Expert committee on hepatitis second report. World Health Organization technical report series No.285	肝炎から肝硬変への進展に関しては、ウイルス性肝炎と肝硬変は関係ないとする観察者がいる一方、慢性活動性肝炎および肝硬変は、臨床上ウイルス性肝炎と区別できない疾病から進展するとする観察者もあり、意見の一致は見られていないことを記載。	他	他	△

注) 文献の種類：学=学会誌、厚=厚生科研費研究、他=その他

文献の性質：レ=レビュー、症=症例報告、原=原著、他=その他

予後の重篤性：○=予後良好と記載、●=予後不良と記載、△=どちらともいえない

(以降の年表においても、上記のとおりである。)